

「罪人のお医者さん」

マタイによる福音書 9:9-13
ホセア書6:6

2026年1月25日
野村 友美 師

<「医者を必要とするのは」>

みなさんは、最近病院に行きましたか？今はインフルエンザが流行っていたり、先週からまた急に寒くなったので、体調を崩している人が多いように思います。ちょっとでも具合が悪かったり、体調がおかしい時には、なるべく早く病院にいってお医者さんに診てもらった方がいいでしょう。

とはいって、病院に行くのはなかなか腰が重たくなるものです。寒いから外に出るのが面倒だし、病院によっては行く前に予約を入れないといけないし、もうちょっと様子をみたら収まるかもしれないし、何か大変な病気が見つかったら怖い。そんな風にモジモジしているうちに、どんどん症状が重くなって、慌てて病院に駆け込むなんてこともあるんじゃないでしょうか。私はまさにその繰り返しなので、反省を込めて今日の話をしています。

さて、私たちはどんな時に、お医者さんに診てもらおうと決心するでしょうか。大きな怪我をしたり病気にかかって、明らかに治療が必要だと思う時。痛かったり動きづらくて、日常生活に差し障りがある時。心や体のしんどさを、自分の力ではどうにもできない時。自分では大したことないと思っていても、周りから「診てもらったほうがいいよ」と勧められる時もあるでしょう。何にしても、明らかに健康

とは言えない状態になった時に、私たちはお医者さんに診てもらおうとします。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」そうイエス様が言われたのも、しみじみ納得できますね。「私は大丈夫」と思っている時には、誰もお医者さんに診てもらう必要を感じません。「大丈夫じゃない、私には助けが必要だ」と自覚した時に、初めて私たちはお医者さんのところに駆け込むものです。本当はどんなに大変な状態でも、一刻も早く治療しないと手遅れになってしまうような状況でも、それを自覚していないと「お医者さんが必要」とは思ってもみないでしょう。イエス様が「医者が必要なのは」じゃなくて、「医者を必要とするのは」とおっしゃったのは、そういうことです。

大丈夫じゃない、私には助けが要る。そう自覚した時に初めて、私たちはイエス様という「お医者さん」のところに駆け込むことができるようになるのです。

<徵税人マタイの召命>

今日の聖書の物語には、2つの場面が描かれています。

ひとつはこの福音書の記者本人とされている人物マタイが、イエス様の弟子になるよう招かれる場面です。

マタイは後に、イエス様から十二人の使徒の一人に選ばれることになります。ですがイエス様と出会った時のマタイは、同じユダヤ民族の中でも「罪人」と呼ばれて嫌われていた取税人の一人でした。

当時のイスラエルはローマ帝国の支配下に置かれていて、政治的な事情で4つの地方に分けて管理されていました。ですから同

じ国の中で移動するのにも、いわゆる関所が設けられていて、そこを通るために通行税を支払わなければならなかったんです。どうやらマタイは、この関所で通行税を取る仕事に就いていたようです。

支配者とはいえ異邦人に雇われて働く徴税人は、ユダヤ人たちにとっては異邦人と同じぐらい汚れている、関わりたくない存在だと見なされていました。しかも徴税人には、決められた金額以上の税金を取り立てて、差額を自分の収入にすることが認められていました。

なので徴税人は、同じ民族の仲間たちからお金を巻き上げる裏切り者、泥棒や強盗と同じ罪人だ、という目で見られていたんです。

マタイが実際にそういうことをして、お金を儲けていたのかどうかはわかりません。それでも、徴税人であるマタイと親しく付き合おうとする人は、同じ徴税人以外にはほとんどいなかったでしょう。周りの人たちからは嫌われて、軽蔑されて、「関わりたくない」という態度で避けられる。

関所を通る旅人たちからも、「罪人め」と言わんばかりに見下される。それはマタイの心をどれほど傷つけて、弱らせて、疲れさせていたことかと思います。これが仕事だ、生きていくために仕方がないんだ、と自分に言い聞かせていたのかもしれません。もしかしたら、もう言い聞かせる気も起きないぐらいに心を麻痺させながら、マタイは虚ろな気持ちで毎日、収税所に座っていたんじゃないでしょうか。

そんな日々を過ごしていたマタイにある日、通りかかったイエス様が声をかけたんです。

「わたしに従いなさい。」

この短い一言が、マタイにとってどんな意味を持っていたのか。それが「彼は立ち上がってイエスに従った」という、マタイの行動に表されてい

ます。この「立ち上がった」という簡単な動作に、福音書は「復活した」という意味を持つ言葉を使っているんです。

そう、マタイにとって、イエス様の「わたしに従いなさい」という呼び声はまさに、死んでいた自分をよみがえらせた癒やしの一言でした。

誰からも愛されないことに傷ついて、疲れて、「でも仕方がない」と諦めて、死んだようになっていたマタイの心に、イエス様の招きが命を吹き込んだ。その嬉しさとか感動とか救いとか、言葉にできない思いのすべてを、マタイの福音書はこの「立ち上がった」という一言に込めて、私たちに伝えているんです。

そして場面は、マタイの家で開かれた宴会に移ります。イエス様と弟子たちは、そのままマタイの家に行って食事をしました。マタイと同じ徴税人たちや罪人たちも大勢やって来て、イエス様一行といっしょに食卓を囲んだ、と福音書はその様子を描いています。

どうやらマタイはお祝いの宴会を開いて、仲間たちを片っ端から招待したようです。昨日までの自分と同じように、痛みや疲れや虚しさを抱えている仲間たちに、癒やされる嬉しさと幸せを伝えたい。できれば今の自分と同じように、癒やされてほしい。きっとそういう気持ちで、マタイはイエス様を囲む宴会を開いたんじゃないでしょうか。ですが、このマタイの宴会に厳しい視線を向ける人たちがいました。ファリサイ派の人々です。律法を守って生きることを何より大事にしている彼らにとって、このマタイの宴会はとんでもない常識はずれのことでした。

異邦人や罪人といった「汚れた」人たちと同じ家の中にいるだけでも汚れるのに、一緒に食事までするなんて！というわけです。

「どうしてあなたたちの先生は、徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と、ファリサイ派の人々はさっそくイエス様の弟子たちに詰め寄りました。それこそどうして彼らは、直接イエス様に言うんじゃなくて、弟子たちに文句を言ったんでしょうか。

イエス様本人よりも、弟子たちのほうが説得しやすいと考えたんでしょうか。

もしかしたら「あなたたちが従っているイエスこそ、律法破りの罪人じゃないか」と、こっそり弟子たちに吹き込んで、イエス様から引き離そうとしたのかもしれません。

この人たちは、ついて行く相手を間違えている。だから自分たちが正しく導いてやらなければ。そんな風に、ファリサイ派の人たちはまるでお医者さんのようなつもりで、イエス様の弟子たちの間違いを「治療」してやろうと考えたんじゃないでしょうか。

そんな彼らに、イエス様は医者の喩えでお応えになりました。

「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」

＜罪人のお医者さん＞

間違えているのは、あなたたちの方だ。医者はあなたたちじゃなくて、この私だよ。

そう宣言するかのような喩えに続けて、イエス様は聖書の言葉を引用しておられます。

「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」とはどういう意味か、行って学びなさい。イエス様が引用しているこの言葉は、旧約聖書の預言者ホセアが語った言葉でした。

「わたしが喜ぶのは愛であって
いけにえではなく、神を知ることであって
焼き尽くす捧げ物ではない。」
(ホセア書 6:6)

ホセアは北イスラエル王国が滅びる直前まで、神様からの愛を訴えた預言者です。いかにも信仰深そうにふるまいながら、神様以外のものも神として崇めていた、当時の北イスラエルの人々に向かって、ホセアは神様からの切実な訴えを伝えました。わたしが喜ぶのは形ばかりの信仰じゃなくて、あなたたちが心から神と人を愛することだ。

わたしがどんなにあなたたちみんなを愛しているか、罪の力からひとり残らず取り返したいと願っているか、そのことを知ってほしいんだ。そう最後の最後まで、ホセアを通して訴えておられた神様の愛の言葉を、イエス様もここでファリサイ派の人たちに差し出したんです。

「どうしてあなたたちの先生は、あんな罪人たちと一緒に食事をするのか。」

そう批判したファリサイ派の人たちは、自分たちの「病」に気がついていませんでした。神様が愛して、何とかして罪から取り返そうとしておられる人たちを、「罪人たち」と切り捨てて見下している。そんな自分たちの「傲慢」という病に、彼らは気づいていなかつたんです。

痛みも自覚症状もない病気は、気が付かないうちに体中に広がって、やがて命を奪ってしまいます。

同じように、ファリサイ派の人たちは自分たちの傲慢さ、神様の愛を無視する自分自身の罪を自覚できないで、天の国の命を失お

うしていました。だからイエス様は、このファリサイ派の人たちのことも助けたくて、彼ら自身の病に気がついてほしくて、預言者ホセアの言葉を突きつけたんです。

「あなたたちも癒やされるべき病人だ、そのことを自覚しなさい」と突きつけて、イエス様は彼らに呼びかけておられます。

わたしはあなたたちのことも招くために来たんだ、と。

「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

正しい人だから、どこも悪いところがない健康で優秀な人だから、天の国の一員として招かれるんじゃないということを、イエス様は改めて教えておられます。

自分自身も他のみんなも、誰もが抱えているどうしようもない弱さと罪を自覚して、お互いに「罪人」なんだと認めて、神様からの救いを求める人。

愛も力も知恵も足りない自分を自覚して、「助けてください」とイエス様のところに駆け込んで、神様の愛と力と知恵に頼る人。

そういう人を招くためにわたしは来た、とイエス様は宣言しておられるんです。罪の病に苦しむすべての人を癒やして、天の国の人を生かす、罪人のお医者さん。それが私たちの救い主、教会の頭であるイエス・キリストという御方です。

病気を認めるのが怖いのと同じで、罪を自覚するのは怖くて辛くて面倒なことです。

「もうちょっと様子を見よう」なんてモジモジしたまま、放ったらかしておきたくなります。

それでも、病人にはやっぱりお医者さんが必要なんです。傷ついて疲れて、死んだようになっていた徴税人のマタイが、イエス様の招きで新しい命を吹き込まれて、立ち上がったように。

神様と人を愛して愛されて生きる、天の国の命を吹き込んでいただくために、誰もがイエス様という「罪人のお医者さん」を必要としているんです。

「私は大丈夫じゃありません、助けてください」と駆け込んでくる人を、イエス様は絶対に無視したり追い返したりはなさいません。それどころか、大丈夫じゃないのに「私は大丈夫」と言い張る人にも、イエス様はいつだって「早くおいで」と呼びかけておられます。

だからどんなに怖くても、腰が重くても、私たちは勇気を出して、いつでもイエス様のところに駆け込んでいきますように。

自分の罪や弱さにしっかりと向き合って、イエス様に助けを求めて、神様の愛と力と知恵に頼ることができますように。

そして必要な時には、他の誰かに付き添つて、イエス様のところへ連れていけますように。

今日もご一緒に、聖霊の助けを祈り求めてまいりましょう。

罪人のお医者さん、私たちの救い主であるイエス・キリストの名によって。
お祈りいたします。